

<要 旨>

本研究は、山田町内に現存する信仰石造物、津波到達碑、海嘯記念碑など（以後石碑）の被災状況を悉皆調査し、併せてその歴史的、民俗的背景を調査、その成果を映像、データ、文書として総合的に記録、先人の教えを後世に向けて伝える基礎資料として残すことを目的としている。地震・津波で被災した石碑の被災状況を調査、あわせて町内のすべての石碑を悉皆調査してその結果を整理、分析、地図上に落とし込むとともに、データベース化した。山田町における被災信仰石造物の全体像が明らかになっただけでなく、悉皆調査の結果として町内に存する石碑のほぼ90歳のデータをそろえることができた。また、地元報告会を開催して、被災文化財の価値とその現状、機能、活用方法に対する理解を深め、その活用について討議、町民だけでなく、沿岸各市町村の文化財担当者に向けて情報発信を行った。

1 研究の概要（背景・目的等）

山田町を含む沿岸各市町村は、繰り返される津波被害によって、いままで多くの文化資源が失われた。特に紙を媒体とする古文書、歴史書、記録の類は多くが流され、人々は自らの暮らしや信仰、歴史、さらには津波被害の現状を後世へ残すために、石にそれを刻むことで伝承してきた。石碑はいわば、歴史の証言者、過去からの手紙（いしぶみ）として機能した。

そのこともあって、沿岸地域には、多くの信仰石造物、海嘯記念碑、津波到達地碑などの石碑が残されている。そうした石碑は地域の古文書、歴史書としての役割を担うとともに、歴史を共有する地域コミュニティの精神的核としても機能してきた。しかし今回の地震津波によりその多くが被災し、転倒あるいは流出した。



写真1：津波により転倒した石碑（織笠地区）

土地のかさ上げ工事、高台への移転工事などハード面での復興が進む中、流失した石碑、文化財等がれきりとして処理されれば、地域の大切な文化財、記録を失うこととなると危惧した山田町教育委員会の要請で、研究代表者と岩手歴史民俗ネットワークによって町内にある石碑を含めた未指定文化財の被災現況調査を進めることとなった。町内全域の石造物の転倒流出状況を把握、山田町教育委員会を通じて町及び工事担当者と当該情報を共有、復興工事において当該文化財が棄損廃棄されないようにするのが第一の目的である。

あわせて、町内におけるこうした石碑の悉皆調査をすすめ、その結果を整理し、それらの成果を町民に還元することにした。地域における石碑の価値を改めて認識してもらい、新たなコミュニティの核として位置付けてもらうため、町内全石碑の映像データも含めた報告書をまとめて刊行、町内全世帯に配布することができるデータの蓄積も目的とした。

2 研究の内容（方法・経過等）

山田町全域（船越、織笠、山田、大沢、豊間根）について、石碑の被災調査を行うとともに、悉皆調査を行った。

調査に先立って、過去調査報告のある『山田町史』（2007）『岩手の石碑』（白澤 正充、2004）の記載をベースにして、地域への聞き取りや実地調査などから新たな石碑を発掘、調査対象に加えて行った。その結果、山田町内に約800基の石碑が現存することが推定された。

当初は、被災現況調査として、被災状況を山田町教育委員会、工事関係者と共有することが目的であった。被災調査の終わった石碑、地区については、その状況を逐次山田町教委に報告し、その情報に基づいて現地における保存処置などに活用され、再建された石造物も複数ある。

調査は、調査員が同じ調査票を使用して調査を進めた。データを共通化して整理、不明部分については再調査を行い、また地域の研究協力者（山田史談会会長川端弘行氏など）の協力を得ながら、修正をかけたデータベース化を推進した。

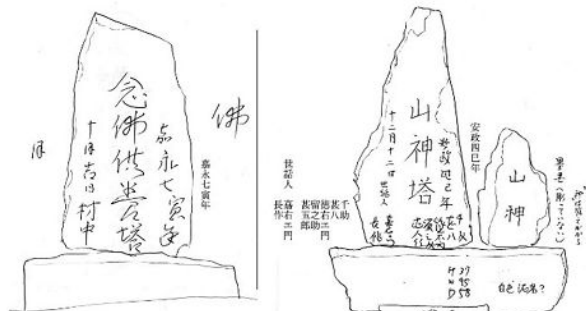


図1：石碑の調査記録

写真1で掲出した織笠地区の石碑は、当該地のかさ上げ工事が急ピッチで進められているため、事前の情報を基に別の場所に移動保管され、また再建が始まっている。

当初は被災石碑のみの調査が目的であったが、石碑の内容を検討分析していくにしたがって、地域におけるその重要性和価値を改めて認識、悉皆調査へと移行、地域の文化財としてデータを整理することとなった。

3 これまで得られた研究の成果

これまでの調査で判明した山田町所在の石碑数については、町内全域で685基を確認、調査終了。うち190基を新規確認した。(平成26年12月段階)注1

地区別では豊間根地区が330基と全体の半数近くを占める。新規確認は全体で3割程度を占めるが、船越地区は44%と割合が高い。これまで知られている石碑のうち今次調査で未確認は140基。探しにくい位置にあるか既に失われたものと思われる。

これまでの調査で得られたデータを地区ごと表にすると、以下の通りとなる。

地区	山田町史	岩手の石碑	2012～2014年調査							
			石碑確認済	石碑未確認	被災石碑	尊像	社	古墓	墓石	金石
豊間根	237	120	330 (76)	64	24	12	19	16	11	7
大沢	40	16	55 (18)	1	13	2	12	3	0	0
山田	100	32	74 (8)	54	24	0	1	1	0	0
織笠	67	34	89 (27)	11	23	10	8	10	3	3
船越	84	82	137 (61)	10	38	15	15	21	16	3
計	578	284	685 (190)	140	122	39	55	51	30	13

*石碑確認済の()内は新規確認数(内数)
 *石碑未確認は、『山田町史』や白澤正充氏『岩手の石碑』(豊間根は長谷川真氏調査分)所載分で確認できていない石碑。
 *被災資料数は、津波や地震によって被災した碑のほか、原状を保っていない碑を含む。
 *尊像(地震)・社(祠)・古墓・墓石・金石は石碑調査に伴い位置などを確認、悉皆調査に至っていない。

表1：山田石碑調査集計表

上記の内被災石碑については、原状を保っていない石碑の総数は122基を数える。大沢、山田、織笠、船越地区は特に被災がひどく全体の25%が被災。流失等で不明とあるものの多くが、船越海蔵寺にあったものと思われる。一方、豊間根地区における転倒、折損は震災以前からのものとみられた。

また再建された石碑も特に船越地区小谷島に多い。



写真2：再建された船越地区小谷島の石碑群

山田町被災石碑の内訳

地区	横転	折損	埋没	斜傾	不明	再建	計
豊間根	7	8	0	9	0	0	24
大沢	5	4	1	0	3	0	13
山田	16	3	0	4	0	1	24
織笠	2	9	2	6	2	2	23
船越	18	1	1	2	9	7	38
計	48	25	4	21	14	10	122

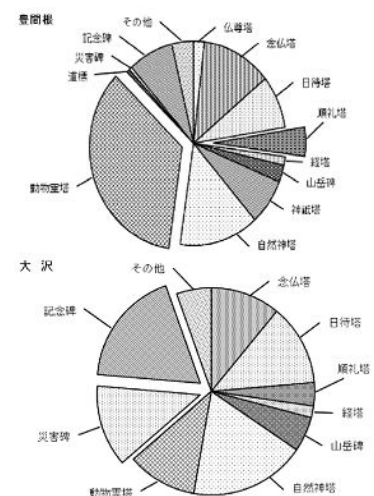
*不明は流失または被災後確認されその後不明となった碑。
 *未確認のものは含まれていない。

表2：山田町被災石碑の内訳

こうした石碑を分析してみると、山田町の各地区の信仰の特徴が見えてくる。例えば豊間根地区は動物霊塔が多く、馬や牛への愛着が強かったことを示している。

一方大沢地区に災害碑や記念碑が多いのは、山田湾に面して、地理的に災害が多かったことに起因するのだろう。

また、船越には念仏塔と経塔が比較的多く、この地区の信仰の中核にある、仏教者秀全様への信仰が根強いことを物語っている。



4 今後の具体的な展開

山田町における石碑の調査は完了していない。今後は確認調査の継続と、石碑のトレース、さらにはデータの分析、データベースの完成が課題である。またそうした成果に基づいた今後の文化財保存、活用に関わる課題抽出が主体となる。

その後は、データベースの完成とともにそれらを掲載した報告書の刊行を目指すこととなる。町の職員が不足している現状では、こうした調査研究を研究者がサポートすることは今も重要な課題である。

5 その他(参考文献・謝辞等)

実地調査には兼平賢治氏(東海大学文学部講師)、鳥取玖美氏(盛岡市教育委員会)、河野聡美氏(同)が共同研究者として数度に亘って参画、調査データを寄せてくれた。また、川端弘行氏(山田史談会会長)、川向聖子氏(山田町教育委員会)に研究協力者として格段のご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

注1：4月以降も、当研究所の補助を資金に調査が進められ、確認された基数は大幅に増えている。